令和元（２０１９）年度後期
授業評価アンケートの結果と分析及び提言
―PDCA サイクルに向けて―

教養教育院総務委員会委員長
南川慶二

目的

大学教育に関しては，教育目的・目標の明確化やその到達度，さらに教育（授業）方法の改善や成績評価の適正化が強く求められている。そのために，学生と教員の双方に対してアンケートを実施し，徳島大学の教養教育について質的・量的に充実した授業の提供をめざすことを目的としている。第３期中期計画・中期目標を達成するためにも学生と教員の双方に対してアンケートを実施し，双方向の PDCA サイクルを確立し，徳島大学の教育目標を達成することを目的とする。

実施方法と時期

平成２８年度から平成３０年度までは，全科目群を３グループに分け，１．５年サイクルですべての授業科目について中間アンケートと期末アンケートを実施してきた。令和元年度前期から毎回すべての授業科目群を対象として期末のみに実施し，分析結果はプログラム評価委員会による授業改善へのフィードバックを行うこととした。令和元年度後期も，この新しい方法に従って全授業を対象に期末アンケートを令和２年１月 14 日～2 月 10 日に実施した。教員に対しては，授業実施報告書の提出（令和２年３月末まで）として実施した。

結果と分析

１）回収率

令和元年度後期の期末アンケート回収率は 63%であった。前期の 73%から低下し，科目群による差も広がった。回収率が低かったのは，イノベーション教育科目群と汎用的技能教育科目群(ともに 52%)及び一般教養教育科目群(53%)であり，比較的高かったのは医療基盤教育科目群(70%)と外国語教育科目群(72%)であった。科目群の違いによる傾向は前期とは異なり，分野の違いよりも個々の授業による違いが大きく影響していると考えられる。前期に比べて後期の回収率が低い傾向は，過去に科目群をグループに分けて実施していた時と同じである。前期末に続いて 2 回目のアンケートであるため，回答による授業改善のフィードバックが感じられないと判断した学生は回答に積極的ではなくなると推測される。回収率向上のためにも，アンケート結果をフィードバックする方法を継続的に検討する必要があると思われる。

２）教員の授業に対する取り組みについて

アンケートの自由記述欄には，具体的な授業実施方法とそれについてのコメントが詳しく書かれている場合が多く，各教員の授業への取り組みや工夫を知ることができる。従来型の講義や演習形式の他に，ペアやグループでの対話を取り入れるなど，様々な形式で授業が行われている。アクティブラーニングを取り入れた授業は全体的に満足度が高いが，従来型の講義で評価が高い例も多く，授業形

式と内容が総合的に判断されている。コメントの記載が多い授業は，特徴的な方法を取っている場合と，満足度が特に高いまたは低い場合である。コメントの少ない授業は特別に記載することがないことを意味しており，不満を感じている学生が少ないと思われる。ここでは，肯定的または否定的な自由記述が見られた授業の例を中心にまとめておく。

今年度前期から全ての科目群で一斉に実施しているため，科目群による傾向の違いをある程度把握できる。一般教養教育科目は，分野が多岐にわたることもあり，多様で特徴的な授業が行われている。配布資料や視聴覚教材の工夫，ミニクイズなどの対話形式，グループでの討論や発表会などを実施している授業などが好評である。従来型の講義においても，教員が自身の専門分野の魅力を「楽しそうに」語ることで引き込まれ，単位を取るためではなく純粋に学問として楽しめたという意見が見られた。教養教育の意義が感じられるコメントと言える。

基礎基盤教育科目群では全体的に自由記述のコメントが少ない傾向にあり，クラス指定で必修の場合がほとんどであることから，与えられた課題を淡々とこなしている場合が多いように思われる。基礎教育では苦手な分野の必修科目に苦戦する学生がある程度存在し，理解度の差がコメントに反映される。自由選択の一般教養教育科目等と比べ，必修科目では授業に対する意思表示をするのは不満がある場合が多い。数学・物理学・化学の一部には，不満のコメントが特に多い授業があった。一方的な講義であった，演習問題を解く時間がない，テストの解説がないなどの意見が散見される。高度な内容を従来型の講義形式で実施している授業で不満を感じる学生が多いようである。教員が設定する理解度のレベルに到達できない学生が多いことは，自学自習の時間が少ないことと関連していると考えられる。講義内容に応じた演習問題を解答し，自宅学習で復習するというサイクルが成立していないことが伺われ，予習復習内容の指導など，理解度を高めるための工夫が必要と思われる。その一方で，予習テストを LMS で実施することによって自習を促す授業には賛否両論のコメントもあった。自主学習ができて理解しやすいという肯定的な意見と，LMS ではカンニングが容易であることや自主的な予習を点数化することの不公平さを指摘する意見があった。多数のレポートを課して添削・返却している授業において，添削が丁寧でわかりやすいという意見と，採点基準が曖昧である(厳しい)という意見が多数混在する例もあった。さらに，毎回小テストを行い，再提出も可能としている授業において肯定的なコメントが非常に多い例も見られた。予習復習を促す方法として LMS の利用やレポートを課すことなどは有効であるが，全ての受講者が満足するように設定するのは困難であり，実施例の情報交換による改善が望まれる。

地域科学教育科目群では，実際に現地を訪れるフィールドワークを取り入れた授業に興味を示した学生が多かった。土曜に実施する場合が多かったことや，費用の自己負担などについて改善を要望するコメントもあったが，概ね好評のようである。今後の地域科学教育実施にあたって参考になると思われる。

外国語教育科目群では，前期と同様に個人発表やペアワークなどの実施率が高く，アクティブラーニングが効果的に行われている。少人数の対話型で行われることから，教員と学生や学生同士の距離が近いことを感じさせるコメントが多い。楽しいという感想も多く，全般的に学生の満足度が高い傾向にある。学生同士で意見交換をする機会が多いことから，積極的に取り組む傾向が見られる。改善要望の例としては，一部の授業で他の学生がうるさくて授業の妨げになっているというコメントが見られた。語学は得意・不得意の差が比較的大きいと思われ，同じ内容でも難しいと感じる学生が苦労している一方で，理解している学生にとっては退屈に感じられるかもしれない。授業妨害のような行為は本人の自覚の問題が大きいが，内容や難易度の調整によってある程度改善できる可能性もある。

TOEIC 対策や専門分野の英語を含めた授業など，内容に特色のある授業や，初修外国語で文化や歴史に関する内容を取り入れた授業には興味を示す学生が多いようであり，教養教育としての語学教育のあり方について参考になる事例と思われる。

同じ学科で異なるクラスに分かれる場合に不公平感を訴えるコメントが前期には多く見られたが，今回は特にそのような意見は見られなかった。ごく一部の授業で能力別クラス分けを希望する意見もあったが，全体的にはクラス分けについての不満は大きくないようである。英語に関しては，前期に基盤英語が多く，後期は主題別英語と発信型英語のみであることから，内容の違いも影響していると考えられる。

３）学生の授業に対する意識

これまでのアンケート結果と同様に，学生自身の受講態度は評価が高く，自学自習時間は短い傾向にある。自宅学習を促す授業も多く，各教員が工夫していることに対して様々な反応が見られる。例えば，宿題をしてこなかった学生や欠席した学生に合わせて丁寧に指導することに関して，このような配慮を評価する記述がある一方で，真面目に課題をこなしている学生からの不満も記載されている例があった。多様化する学生の意識の分布が広がっている傾向が見られ，対応の困難さが伺える。

授業の実施方法の一つとして，e-learning (manaba)を利用する授業が増加し，その利用形態も多様化しつつある。オンデマンド形式の授業を初めて受講した学生のコメントとして，予想以上に良かったというコメントがあった。空き時間を利用して自分のペースで学習できることが特に便利と感じているようである。予習復習を含めた単位制度の実質化において現在不足している自習時間を補う方法として，今後さらに活用することが期待される。

４）講義室の環境について

自由記述欄の改善要望において，講義室の環境に関する記述は前期に冷房の時期等の記載が多かったことに比べると，今回のアンケートではそれほど多くなかった。秋から冬にかけての寒暖の変化が大きい時期であることから，状況によって異なる意見があった。広い講義室で寒いという意見がある一方で，狭い講義室に多人数が受講している場合には暑い，または換気をしてほしいなどの記述も見られた。今年度前期から導入された BYOD による影響として，前期には Wi-Fi 接続環境が整っていなかったことに関するコメントが多かったが，半年を経た後期であるためか，今回のアンケートでは少なくなった。ただし，一部の授業では Wi-fi 環境を整えてほしいとの記述もあり，さらに環境を整備する必要がある。

総括

全科目群で中間アンケートを省いて期末のみ一斉実施としたことで，今回は前期末に続く 2 回目のアンケートとなった。回収率が前期よりも 10%低く，授業改善への学生の意識が全体的に低下していることが伺われる。授業の実施方法や学生自身の学修態度等は，科目群の全体に共通する傾向が見られる場合もあるが，個々の授業による違いの方が大きいようである。教員が独自に工夫した実施方法やそれに対する学生の評価についての情報交換を行い，継続的にフィードバックすることが望まれる。